

マリーナス標準時 4 時 42 分。

薄暗い、灰色がかった空気を切り裂くようにして白い輝きが地平線の向こうからやってきた。

13 時間ぶりの太陽との再開。日の出だ。

そして世界は、太陽の目覚めによってその姿を一変させる。

放たれる温かな光に呼応するかのようになり、鳥たちが一斉に歌い出した。鳥だけではない。ミルラやラディ、クロフトにチャーといった動物たちも一斉にその動きを活発なものにする。

風がそよいで木々を揺らし、草木がざわめく。息をひそめていた生きとし生けるもの全てが動き出す、そんな時間帯。

そんな中、未だに目を覚まさないねぼすけさんがいた。

それは美しい少女だった。年は 13, 4 歳ほどだろうか。

飾り気のない白いワンピースに包まれた小さな躰は、服装と相まってどこか儂い雰囲気醸し出している。

幻想的な白髪は地面に投げ出され、少女の眠る色鮮やかな花畑に銀糸を散りばめていた。

眠り姫が如く眠る少女。そんな彼女を起こしたのは、王子様ではなく太陽であった。

薄い瞼越しの光に刺激され、瞑られた眼が徐々に開いていく。

現れたのは艶やかな黒い瞳。少女は眠たげな眼を瞬くと、上体を起こしてぐぐつと背伸びする。

「……………んはあ」

思わず口から漏れ出た吐息とともに、少女の一日が始まった。

ちろちろという音が聞こえてくる。

少女は小さな川のほとりへとやってきていた。

しな垂れかかるように生えた木々が川をトンネルのように覆い、水面に黒々とした影を落としている。

川底がはっきりと見えるほどに澄んだせせらぎは、辺りに涼を振りまいていた。

肩ひもに手をやり、一つ、二つと肩をなで下ろしていく。手を離すと、純白の衣服は重力に従った。これまで少女を覆っていたものがすとんと足元へ落ち、隠されていた柔らかい体躯が露わになる。

地面にふわりと広がったそれを木の枝に引っ掛けると、自然そのものとなった少女はそのまま流れの中へと入っていった。

足首、膝、ふともも。川の真ん中に向かうにつれて、段々と水が白い柔肌をせりあがってくる。さわさわと触れてくる流水と戯れながら進みゆく少女。くすぐったさからか、口角には笑みが浮かんでいる。

腰のあたりまで浸かったところで少女は手ですくった水を体にかけて始めた。

瑞々しい肌を滑り落ちていく水滴たち。太陽の光を反射した液体が、少女の起伏に白く輝くシュプールを思い思いに描いていく。

ここまで歩いてきて少し火照った体に水の冷たさが心地よく、少女は身体を伝う涼に慎ましやかな双丘を反らして感じ入った。

やがて身体が冷たさに慣れると、少女はゆっくりと背中から水面に倒れこんだ。水に我が身を任せ、ゆったりとした流れにたゆたう。

ぱしゃぱしゃと水面と触れ合うと、上流から流れてきた白い花びらがしびきとともに唇に触れ、甘い匂いを漂わせた。

眼を開けると、澄み渡った空が若々しいライトグレーをした木の葉の隙間から覗き込んでくる。

仰向けに浮かんだ少女の白磁には木々の影と白い花卉がコントラストを成し、一種の芸術作品を完成させていた。

浮遊感に包まれていると、なぜだか時間までもがゆっくりと進んでいくような感覚を覚える。

絵画のような一秒一秒がゆったりとコマ送りに進む、そんな優美な空間がそこに広がっていた。

美しいグラデーションを織りなす空。真っ白な雲がグレーのバックによく映えて、映り込んで水面を彩る。銀の糸を纏って浮かぶ少女はさながら宙を舞う天使のようだ。

花、木々、水、空、そして少女。ここは、美しい色彩に囲われた箱庭。

水浴びを終えた少女は森の中の道に行く。
森の中は不思議な静けさに包まれている。ただそれは不気味さを感じさせるものではなく、どこか落ち着くような静けさだ。
時折道に現れる木の根っこ。つながったその先には、板のように育った根、そして太くたくましい幹がそびえる。ざらざらとした感触の肌に手をやると、なんだか木の鼓動が聞こえるようだ。
大きな体を広げ、天に向かって手を伸ばす大樹。森はそんな木々で覆われている。けれども、それは決して空に蓋をしているわけではない。見上げてみればわかる、黒々とした葉と美しい灰色の空のモザイクが。風に揺れる枝とともに刻一刻と姿を変えるその絵画は、森の中に太陽の光を散りばめている。そうしてもたらされた光の足元で、若く小さな芽が顔を出していき、森の地面を鮮やかに彩る草たちや、森自体を形作る木々になっていくのだろう。白く柔らかい新芽が誇らしげに笑っているのが何よりの証拠だ。
風にそよぐ芽を見つめて、少女は小さく微笑んだ。

がさごそ、静かな森に響いてくる騒がしい音がある。なんだろう、そう少女が思った瞬間、足元を何かが通り過ぎて行った。

「うわぁ?!」

小さな悲鳴とともに思わずその場に座り込む。その声を聴いて、悪戯の犯人は得意満面に振り向いた。
三角形の耳につぶらな瞳。ぴょんぴょんとせわしくしっぽを動かして少女に飛びついてくる。
全身をもふもふとした灰色の体毛に包まれたいたずらっ子の正体はトッドだった。
人懐っこいこの動物は少女の家に住み着いている。恐らく家主の帰りが待ちきれなかったのだろう、こんなところにまでやってきていたのだ。

「……びっくりした……こら、家にいなきゃダメでしょ？」

項垂れた様子のトッド。そのしょぼくれた背を撫でながら少女は言った。

「ふふ……ほら、帰るよ」

一人と一匹が道に行く。森の出口はもうすぐそこだ。

森を抜けると、正面に小高い丘が見えてくる。その頂上に立つ丸太づくりの小屋が少女の家だ。

「ただいまー」

そう言ってドアを開ける。家の中から返事はない。ただ傍らのトッドだけが元気よく返事をしていた。

ダイニングテーブルに目をやると、どうやらいつもと様子が違う。

いつもであれば朝食が用意されているはずなのだが、今日はバスケットが一つ置いてあるだけだ。

たまにピクニックに行きたいな、と思ったときに少女が自分で用意しておくバスケット。それが今日はひとりで用意されている。

不思議に思った少女はこてんと首をかしげた。頭の中で？マークがくるくると回る。

しばらく考え込んだ後、少女はポンッと手をたたいた。そうだ、今日は天気もいいし外で朝ごはんを食べよう。

思い立ったら話は早い。バスケットを抱えて外へ飛び出す。

家の建っている丘には、大きな木が一本生えている。大きな黒々とした実を付けたリンゴの木だ。

日の出からぐんぐんと空に上っていった太陽は、この時間になるとキラキラと照りつけてくる。

暑さを感じるようなその光を避け、少女は木陰に座るとバスケットを開けた。

入っていたのはバゲットサンドだ。小ぶりのサイズで種類の異なるものが二つ入っている。

一つは生ハムがメインで、レタス、トマトが挟まっていてパンにはクリームチーズが塗られている。

もう一つは薄切りの豚肉と千切りのニンジン、キャベツ、それと玉ねぎが挟まったサンドイッチ。どちらも美味しそうだ。

どちらから食べようか迷っていると、ぐううという音がお腹から出てきた。考えてみれば朝から水浴びをして森を超えて、随分とあちこち動き回っていた。道理でお腹もすくわけだ。

俄然空腹感を感じた少女は、もう待ちきれないとばかりに目に飛び込んできたサンドイッチを手を取った。小さな口を目一杯に大きく開いてかぶりつく。

まず飛び込んできたのはハードな食感のバゲット。噛めば噛むほどに小麦の味とバターの香りが口いっぱい広がっていく。

顎の力を使って噛み進めていくと現れてきたのはみずみずしいポークだ。甘辛い味付けをされた薄切りのポークは脂乗りもよく、口に入った瞬間うまみを爆発させてとろけるようにして消えていく。

付け合わせに入った野菜はどれも新鮮で、シャキシャキ、コリコリとした食感がいいアクセントを加えている。何より断面から覗く彩り。料理は目でも食べるとは、誰が言ったかの的を射ている。

進む肉汁とソースで手をべたべたにしながらあっという間にポークサンドを平らげた少女は、続いて生ハムサンドに手を伸ばした。

こちらは先ほどのジューシーなサンドとまた違ってさっぱりとした仕上がりだ。生ハムの強い塩味と癖のある風味をクリームチーズがうまくやわらげ、トマトの清涼感が口の中を駆け抜ける。

意図していたわけではないが、この順番で食べて正解だったかもしれない。

汁気たっぷりのトマトで指を湿らせながらこちらもあっという間に食べ終わってしまった。

名残惜しそうに指についたソースや汁までしゃぶりつくす少女。

バスケットに入っていたアイスティーを飲みながらお腹をさする。

まだもう少しだけ物足りない。いつもだったら果物やゼリーなどのデザートまで入っているのに、お腹がペコペコの今日に限ってそれが入っていないなんて。

ため息を一つつくと少女は目を瞑り、その場で仰向けに寝転んだ。

風がそよぎ、前髪が揺れる。ご飯を食べて若干火照った体に気持ちのいい涼しさだ。

少し体を起こし、木の幹に体を預けて前を向く。ここは小高い丘の上、眼下には素晴らしい景色が広がっていた。

黒々とした森がずっしりと座り、さわさわとそよ風に揺れる草花は陽光を受けてか白く輝き、どこまでも広がる空の吸い込まれるような黒と相まっていっそう美しく照り映える。

少女はここから見える、この美しい風景が大好きだった。

生まれた時から幾度となく見たこの景色が。色合いの異なる植物が、自然が、一体となって織りなすこの光景が。

ぐぐっと背伸びをする。少し時間が経って空腹中枢が落ち着いてきたのか、陽気と相まって意識が蕩けてきた。

体を脱力して木の幹からずり落ちて寝転がる。頭上では木の葉とよく熟れた実とが揺れ動き、ちらちらとする木洩れ日と合わさってさながら自然のステンドグラスのようだ。

……よく熟れた実？眠たい頭で考える。

そういえば、木には真っ黒なリンゴが実をつけていたではないか。

さっきのお腹がすいていた時、デザートでリンゴを食べればよかった。少女はそう思い至ったものの、今となっては眠気が勝る。

うとうとと眠気と格闘したのち、勝負に負けた少女の双眼はゆっくりと閉じていき――

――耳元で聞えた何かが落ちてきた音で再び開いた。

リンゴの木の下で寝ているのだ、落ちてきたのは当然リンゴだろう。

そう思い、首をコテンと倒して視線を横に向ける。目に飛び込んできたのは――見たこともないものだった。

それは確かにリンゴの形をしていた。その表面はよく熟れたリンゴと同様、光を反射してぴかぴかと輝いていた。

しかし。

この物体は、見たこともない色をしていた。リンゴの、あの黒々とした見慣れた色ではない色を。

それどころか生まれてこの方一度も見たことのない色を。

恐る恐る手にとって触れてみる。ずっしりとした重さ、触感、そして香り。どこをとってもこれはリンゴとしか言いようがない。ただ一点、色を除けば。

少女は脳細胞が燃え上がっているかような感覚に震えていた。

湧き上がるような感動に震えていた。

なんて美しいのだろう、と。

……そして、そこで少女の意識は暗転した。

――世界が切り替わる。まるでスイッチでも押したかのように一瞬で、かつ劇的に。

「ううん……」

少女が目覚めたのは太陽が空のてっぺんまでたどり着いて程ない頃だった。起床直後特有の脱力感に抗って起き上がると、瞬間あの色のことを思い出した。あの得も言われぬ鮮やかで美しい色。あれは夢だったのだろうか、それとも現実だったのだろうか？

あのリンゴを探して足元を見渡す……も、リンゴは見当たらない。ならばあれは夢？しかし、夢にしてはあまりにも鮮明だったあの色。いったいどこに……

そう思い、視線を足元から遠くに移した少女は愕然とした。

いつも見慣れていたはずの丘からの眺め。ついさっき見たはずの景色が、全く違うものになっていた。

眼下に広がる草原に点々と見えるあの鮮やかな色。あれは花畑ではなかったか。吸い込まれるような黒色をしていたはずの花は、燃えるような、リンゴと同じ色。そう、「赤」。真っ赤に染まっていた。

黒とグレーと白とが絶妙なコントラストを成していたはずの花は赤と白とその中間色……桃色のコントラストに変わっている。

はっと気づいて上を見上げる。黒々としたリンゴの実がたくさん生っていたはずそこには、真っ赤なリンゴの実があった。

少女は、己の目を疑った。

朝ごはんのバスケットもその場に置いたまま、急いで家に戻る。

玄関を慌ただしく駆け抜け、トッドの抗議するかのような鳴き声を聞き流しながら洗面台に向かう。

備え付けられた鏡には見向きもせず、蛇口をひねると少女はバシャバシャと自分の顔を洗い、目を洗淨した。柔らかなタオルで顔についた水を拭き取り、顔を上げる。

そこには、深紅の瞳をした少女がいた。

少女は再び外に出てバスケットを拾うと、家の書斎へと向かった。古典力学、古典相対性理論から宇宙標準力学に至るまでの物理学の本や重力工学、超光速推進工学などの技術書、太陽暦 400 年頃の歴史書までそろったこの部屋。この部屋のどの本にも今起こっている現象については載っていなかった。……そう、少女が眠っている間に世界は色づいた。これまで見たことも聞いたこともない未知の——美しい色に。何の比喩でもなく。

初めに感じたのは恐怖だった。世界が変わってしまったという恐怖。未知の色が突如として現れたという恐怖。人はいつも未知に恐怖する。知識の暗闇を恐れる。となれば、これは然るべき反応であろう。

次に少女に芽生えたのは好奇心。未知という暗闇を照らすのはいつでも好奇心という光だ。この色は何なのか、どうして色づいたのか。知りたいことはたくさんあった。

そして、この色に出会ってからずっと感じていたことがある。……それは、この色は美しいという事。美しい自然に取り囲まれて育ってきた少女は、確かな感性を育んできた。その少女からしてこれは美しいと、そう自然に感じさせるものが赤という色にはあった。

白と黒。単純にして完成された色で鮮やかに彩られていた世界。そこにやってきた赤という色は世界を破壊しに来たのではない。世界を彩りに来たのだと、そう少女は感じたのだ。

たった一色が加わっただけで世界は見違えるほど鮮やかになった。外を出歩くたびに新しい出会いがあった。落ち葉の絨毯がふかふかで気持ちのいい秋森では、黒々として夏森の木の葉とさしたる違いのなかったはずの葉が真っ赤に燃えて目にまぶしい。春の野に咲く花もピンクや赤で彩られ、グレーの草の中でこれまで以上に匂いだっている。川のほとりの低木は小さな赤い実を付け、小鳥たちがそれをついばみに訪れていた。

バスケットに入ったサンドイッチには、真っ赤なトマトが挟まっている。ほんのりとピンク色をしたベーコンとともに、これまで以上に目を楽しませてくれるようになった。

湖のほとりを歩いていると、何か赤い影が水面下に見えたような気がした。しゃがみ込んで覗いてみると、そこにはゴールドフィッシュが。この魚も赤色に染まっているとは知らなかった。

植物だけではない、動物をもこれまでとは違った色合いになっているという一つの例だ。

そのままじっと水面を見つめる。例と言えば、少女の瞳もそうだ。真っ黒だったはずの双眼は、深紅の瞳へと装いを変えていた。初めは戸惑いもあったものの、今ではこの宝石のような瞳が自分でも好きだ。

白と黒、それに赤。3つの色で形作られるこの世界は相も変わらず……いや、これまで以上に美しい。そう、少女は思った。

それから、少女は色々な新しい色に出会った。

草木を彩る緑。月と花を輝かせる黄色。しな垂れて香る紫。

世界にはたくさんの色が隠されていた。

少女はそれらを一つ一つ見つけると、その度に新たな色の美しさに感動を覚えた。

いつしか世界は色であふれ、異なる色と色とが織りなす複雑で美しい自然がそこにあった。

少女は今日もこの自然の中で暮らしている。毎日、新たな色を探しながら。一つとして同じものがない、色彩が無限に広がる世界で。

下品な色彩に染まってしまった世界を、元の美しい世界に。
幼い頃から父に聞かされてきた私のすべきこと。
父は祖母から、祖母は曾祖父から。一族代々言い伝えられてきた果たすべき使命。
……それは呪いとでも言うべきものだったのかもしれない。

……彼女は私の使命について何も知らなかった。
当たり前だ、私が言わなかったのだから。
彼女という時、私はこの呪われた一家から離れることができた。
使命を忘れ、ただ今という時を楽しむことができた。今だけでない、その先の幸福な未来にまで想いを巡らすことができたのだ。
……私は彼女のことを深く愛していた。共に明るい未来を歩みたいと、そう思っていた。

……だが、それは叶わぬ夢だった。使命から逃げ出すことは許されないのだろうか。
……彼女は死んだ。マリーナスで、次元濁流に飲み込まれて。残された亡骸は首から上を失っていた。

深い悲しみと絶望に打ちひしがれた。生きていこうという気力すら失うほどに。
血を呪った。使命を恨んだ。そうでもしなければ、彼女が死んだことを受け止められそうになかった。
私は使命を果たすことにひたすらに打ち込んだ。この呪いを終わらせるために、彼女がいなくなった悲しみを忘れ去るために。

……そして、私は先祖代々の宿願を果たした。
世界から下品な色彩のすべてを奪い、元の美しい白と黒に戻すという使命を。
だが、使命を果たしたというのに私の心は晴れなかった。ある疑念が日に日に私の中で大きくなっていった。
それは、どちらの世界のほうが美しいのかという事。

この白と黒の世界は確かに美しい。単純で、完璧な美しさだ。
幼い頃から追い求め続けた美がまさにここにある。
……しかしながら、私の人生で最も美しかった時期の思い出が何度も頭の中でリフレインするのだ。
彼女と過ごしていたあの日々。世界の全てが美しかったあの日々。

彼女はよく言っていた。私はこの色とりどりの景色が好きなの、と。春夏秋冬それぞれの色に満ちた景色が好き、と。

私はそれらの時間を、景色を、彼女とともに過ごし、そして確かに感じてしまったのだ。

ああ、なんて美しいのだろう、と。

どちらが美しいのか。私にはもはや判断のしようがなかった。

……だから、一つ賭けをすることにした。

この白と黒の世界で生まれ、そしてその美しさのもとで育った人は、彼女の愛した色とりどりの景色とどちらを美しいと感じるのだろうかという賭けを。

そうして私はこの箱庭を作り、少女をここまで育て上げた。

賭けの結果は……ご覧の通り。選ばれたのは彼女の好きだった色にあふれた風景だ。

母親似で美人に育ったあの子だ、この結果は当然だったのかもしれない。

ただ、私の世界で育った子だ、賭けの結果を素直に受け入れることにしよう。

パネルを操作する。これで全世界から奪われていた色が元に戻ったはずだ。

私は……まあ世界から色を奪った大罪人だ。捕まれば終身刑は確実、この研究所もじきに見つかってしまうだろう。

……これからどうしようか。これまでずっと使命に縛られてきた人生、何をしてもいいとなると急に何をすればいいかわからなくなる。

……そうだ、世界を回ってみようか。あの子が選んだ無限の色彩の世界、その美しさを私も存分に味わわせてもらおう。

支度をしてこの場所をマリーナス警察に連絡する。これであの子も保護されるはずだ。

……本当に彼女そっくりだな。

愛情をもって育てたつもりではあるが、それでもやはりこんな実験に巻き込んでしまった以上、私はもうあの子に何かをする権利はない。

私はただ、こう願うばかりだ。幸せになってほしい、と。もう呪いは解けたのだ。

風がそよぐ。

深緑の木々が揺れ動き、若草色をした野の草たちが歌う。

色とりどりの花たちが咲き誇り、極彩色の鳥たちが石榴色の果実をついばむ。

その景色を見て、少女は微笑んだ。

どこまでも広がる青い、青い空の下。

——今日も世界は美しい。